

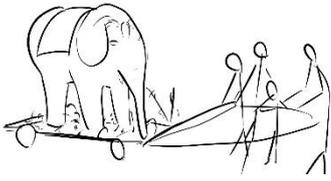
# 行像

ぎょうぞう  
京都では、梅雨が明ける頃になると、祇園祭の季節がきたと市

内のあちらこちらで鉾や山車の準備が始まります。メインは市内を山鉾が廻る山鉾巡行です。むしむしとした京都独特の暑さの中、鉾を大勢で引っ張る姿は圧巻です。

このように、神仏などを御輿（神輿）に乗せ、巡行することは、日本各地の祭りで見られます。このおそらくはルートになるのではないかといいことで、今回は「行像」をご紹介します。

7世紀、西遊記の三蔵法師のモデルとなった玄奘三蔵が、ガンダーラを指しシルクロードを歩んでいるときには、すでに仏像を車に乗せて巡行することが記録されています。この巡行のことを「行像」といいます。その頃から、お釈迦様がお生まれになったことを祝う降誕会（花まつり）の際には、仏像を車に乗せて引いていた



うです。菩薩や仏が来迎することを、模したとも言われています。こちらから行くのではなく、向こうから迎えに来ていただく大乘仏教の思想がよく表れているのが「行像」です。



虫がいてコワイ、  
多分虫の方が  
「わいはす」  
身存私

# こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

## 教相判釈

きょうそうはんじやく  
宗派は何故誕生したのでしょ  
うか。「教相判釈」は、身近では  
ありませんが、宗派が何故うまれ

たのかを知る重要な言葉ですので記させていただきます。

約二五〇〇年前に、インドでお釈迦様が仏教を説かれました。伝え方は口伝、口頭で伝えられました。その後、お釈迦様が入滅され、教えを記録するようになりました。経典の始まりです。初期は、お釈迦様の言葉がそのまま記されていましたが、だんだん直接の言葉ではないことも記されるようになります。仏陀により近づいた方々が、仏教を更新していくのです。一つの流れを大乘仏教運動といいます。同じ仏教でも、多様な教えの説き方が生まれ、その数だけ経典は生まれたのです。

そして、中国に伝わります。インドの言葉から漢字へ翻訳作業が進められました。ところが、インドでは時代を経て変わっていった仏教も中国には新旧問わず入ってきたのです。そこで、経典を整理することが重要課題となりました。その中で、多くの経典の中で仏教で重要な教えはこれだと強調するようになりまし。それを教相判釈といいます。何故このお経を引



つ張ってきたのかということ論じていくのです。  
浄土真宗では、凡夫の為に説かれた大無量寿経を拠り所とされました。